

③ 琉球王国時代から現代に於ける沖縄（琉球）の芸能祭祀と紅型
——紅型の衣裳と幕について——

研 究 者：(財)海洋博覧会記念公園管理財団 学芸員

沖縄国際大学南島文化研究所 特別研究員 兒 玉 絵里子

はじめに

沖縄に於ける従来の紅型研究は、沖縄県立芸術大学および沖縄県立博物館・美術館、那覇市歴史資料室に所蔵される琉球王国時代末期から大正・明治期の、琉球国王第22代当主 尚弘と鎌倉芳太郎による旧蔵資料の調査研究が主で、王国時代紅型の模様や色彩の分類分析、紅型の特色を明確化するための日本や中国ほかの染織意匠との比較対照研究、あるいは、琉球王国の歴史や紅型の意匠的特質を資料として紅型の発生と源流を考察する研究が中心であった。近年約40年間は、国内はもとより沖縄県内に於いてさえ、近現代の琉球紅型に関する新知見をまとめた論考は発表されていない（本報告者を除く）（注1）。いわば主たる調査研究方法も確立されていない紅型研究に於いて、報告者は、現地での聞き取り調査を重視して従来看過されていた個人蔵をも含む埋もれた資料を辿る作業を続け、学位論文（注2）を中心とする論考により、第二次世界大戦後の紅型復興期以降を中心とする近現代琉球紅型の実像を少なからず明らかにすることができたのではないかと考えているが（注3）、現在は最も大きな課題として、これまで染織史・宗教史・芸能史・民俗学の各分野に看過されてきた、沖縄（琉球）の芸能祭祀の場に用いられる「紅型」という問題に着手させていただいている。約450年間の琉球王国時代を経た沖縄には、今なお、王国時代御冠船踊の流れをくむ古典舞踊や組踊、廃藩置県後の創作（創作舞踊や新組踊ほか）、王国時代の祭祀に連なる各地域の民俗芸能など、独自の芸能祭祀文化が残されている。しかし、それらの場に用いられる染織についての考察は、学問分野の狭間に置かれた複雑さや資料の存在の有無をも含む情報収集の難しさ、調査の困難さなどを背景としてほとんど行われておらず、報告者はそうした従来の研究の盲点に取り組むことで、これまで伝世品そのものの特質や技法を中心に語られてきた「紅型」の文化的背景や存在の意味について、信仰や風俗などといった文脈の中で深くその特質を考察し、明らかにしたいと考えてきた。第二次世界大戦地上戦により多くの歴史的資料が散逸焼失し、文献資料がほとんど残されていないがために衣裳や裂地として残された「伝世品」という現物を通じての考察に頼らざるを得ない「紅型」という沖縄独自の染織について、時代や社会の中で紅型そのものが担っていた重層性、思想的意義をも含む新たな姿を見

いだせるのではないかと考えたからである。この度、公益財団法人鹿島美術財団による助成を賜り、あらたに沖縄県内の多くの方々の御協力のもと調査を行わせていただくことができた結果、これまで個人蔵として使用されていた資料、あるいはその存在を地元でも限られた方々しか知らないという複数点の重要な初公開資料を発見するに至った。職場勤務の一方で限られた日程を報告者側からお願いするという形をお聞き届けいただき、ご協力者の方々には、後世に資料を伝え遺したいという強い願いのもと、地域あるいは個人の遺産・財産を公開し調査をお許し頂くという格別の御支援御厚情を賜りました。このかけがえのない研究の機会を賜りました公益財団法人鹿島美術財団と県内外の多くの方々に深く感謝御礼を申し上げますとともに、本報告書に取り上げる資料の分析考察が未だ断片的である点については稿を改めることとどうかお許し頂きたい。（文中、敬称略）

一 踊衣裳調査について

琉球王朝時代末期～大正期の伝世品、および、近現代の踊衣裳という二つのテーマのもと、一年間にわたり沖縄本島および周辺の島々にて調査を行った結果、前者については伊是名村で新しい発見があり、後者については、まとまった作品集なども乏しい第二次世界大戦後紅型復興期第一世代紅型師による踊衣裳について、従来、文献などに公表されたことのない意匠による複数点の紅型衣裳を確認することができた。本調査報告書では、その中で特に重要と思われる紅型について紹介させていただく。

二 伊是名村勢理客の踊衣裳（王朝時代末期～明治）

1. 調査概要

伊是名村（伊是名島）は第二尚氏王朝（1470-1879）始祖 尚円王（金丸）生誕の地として、史跡「伊是名城」・「伊是名玉御殿」、あるいは尚円王の家筋「四殿内」に係わる国指定重要文化財「銘苅家住宅」および「銘苅家」旧蔵古文書・美術工芸品93点、伊是名村指定有形文化財ほかの「名嘉家」旧蔵「伊平屋の阿母加那志拝領品」ならびに美術工芸品、南風のタハダ「玉城家」・北のタハダ「伊禮家」蔵美術工芸品など、多くの有形文化財が伝世される。調査に先だつ島出身者への聞き取り調査では、概して「伊是名には紅型は無いのではないか」ということであったが、濱里長希氏（野村流音楽協会）、伊禮一昇氏（元 仲田区長）、仲田好二氏の全面的協力のもと、「組踊」ほかの踊衣裳を所蔵する仲田・諸見・勢理客・伊是名の各集落に保管使用される踊衣裳、および幕を調査させていただいた結果、勢理客に極めて重要な王朝時代末期

～大正時代の紅型踊衣裳が遺されていることを発見した。同衣裳は沖縄県による県内染織資料調査においても発見されず、過去に一度もその存在が公表されたことのない資料となる。その伝世に深く関与した同集落の東江喜美氏、末吉正子氏も、わずかに「戦前から伝えられた衣裳」という情報を持つばかりで、関係者の間では古くなっているために破棄をしてはどうかなどという意見も出たことがあるというが、東江、末吉両氏が「先人たちの遺したものを遺したい」（東江）との思いにより、管理し続けてきた。このほか、「仲田」にもかつては紅型を含む戦前からの古い衣裳群が存在していたが、数年前の台風の際に、保管していたコンテナごと海に流されてしまったという。

また、伊是名村には、戦前戦後にかけて、沖縄本島から、宮城能造（初代）（1906-1989）（国指定重要無形文化財「組踊」総合認定保持者、沖縄県指定無形文化財「琉球歌劇」保持者、沖縄県指定無形文化財「沖縄伝統舞踊」保持者）や親泊久玄（1939-）（親泊本流親扇会二代目家元、国指定重要無形文化財「組踊」総合認定保持者、国指定重要無形文化財「琉球舞踊」総合認定保持者）、島袋正雄（1922-）（野村流師範、国指定重要無形文化財「琉球古典音楽」保持者、国指定重要無形文化財「組踊」総合認定保持者）などの組踊関係者が来島し、仲田や諸見ほかの集落で村民が取り組む舞台の指導にあたったが、今回の調査では、「仲田」の組踊で近年まで使用され続けた、宮城能造（初代）の手書きとなる重要な幕が存在した事実も明らかになった（後段、幕の項にて取り上げる）。同幕は勢理客の紅型衣裳と同じくこれまで文献などに掲載されたことも無く、本調査報告書において初めて、宮城能造制作の幕と村外に公表されるものである。

2. 勢理客の紅型踊衣裳四領

同素材同模様の水色地二領、および、同素材同模様の黄色地二領である。染めの技術は水色地の方が、黄色地よりも高く、また、水色地の方が、黄色地の紅型よりも時代的にさかのぼるものと考えられる。勢理客は伊是名島の他の部落の人たちに比べ、大柄な人が多いというが、衣裳の寸法は次の通りである。

【水色地①②】 丈136.5～137.0cm／衿135.0cm／袖丈58.0cm／袖幅33.0cm／木綿〔図1〕

【黄色地①②】 丈127.0cm／衿133.0cm／袖丈56.0cm／袖幅34.0cm／木綿〔図2〕

戦後になって同衣裳が「組踊」に使用されたことは無いということであるが、ともに二枚組になっていることから関係者によれば、戦前、「組踊「護佐丸敵討」のかみじゅう・とらじゅう、あるいは、乙樽・鶴松役などに使用したのではないか」という。

現在では、伝統祭祀「イルチャヨー祭り」（旧暦8月11日）において、「弥勒」を務める男性の背丈に合わせ水色地か黄色地を選び、着用〔図3〕。なお、勢理客では現在、「組踊」には白地の幕を背景に用いている。

【黄色地流水蛇籠沢瀉菖蒲文様紅型踊衣裳】 沖縄県立博物館・美術館蔵「木綿白地鳥流水蛇籠菖蒲文様衣裳」、および1977年（昭和52）頃まで屋我地村我部の踊衣裳として使用されていた「木綿白地蛇籠流水菖蒲葵鳥模様紅型衣裳」（名護博物館蔵）と同模様。【水色地震枝垂桜蝶山水菖蒲桜菊文様紅型踊衣裳】 袖口と前身頃は両面染。他の紅型踊衣裳にみられるように、舞台での動作に伴い袖口や裾から生地裏面が見えてしまうことを念頭に置き、なされた工夫である。型紙一枚で染められた肩から胸元にかけての図案が、屋嘉の踊衣裳（金武町指定文化財「白地震枝垂桜流水菖蒲籬朝顔花の丸模様紅型衣裳」）、および、松坂屋コレクション「白地震枝垂桜燕鳥に菊扇色紙短冊模様衣裳」と同一。裾の模様も竹富で若衆踊に用いられたリンクラー「木綿黄色地山水菖蒲鶴亀文様衣裳」（大正時代、喜宝院蒐集館蔵）と同模様だが、腰に配された蝶の意匠が興味深い。これまでの調査の中で、沖縄県内に伝世される琉球王朝時代～大正期の踊衣裳、あるいは王朝時代「楽童子」の着用とされる紅型衣裳の意匠が、伝世品が少ないながらもある程度共通した意匠を表す点が明らかになっていた（注4）が、今回の調査で見出された勢理客の踊衣裳も同一の特徴を有しており、廃藩置県後、各地域に継承された紅型踊衣裳に特定の意匠が意図的に選択されていたことが、さらに裏付けられる結果となった。染めの技術は水色地の方が優れ、年代も水色地は王朝時代最末期～明治期にさかのぼり、優れた紅型師によるものと考えられる。黄色地は明治～大正期の作か。黄色地紅型は染め・彫りともに技術的にはやや劣るが、いずれも伊是名における廃藩置県後の芸能祭祀の様相を伝える貴重な伝世資料である。

なお、伊是名村をはじめとする豊年祭踊衣裳として残された「紅型」の表象する思想的背景を考察する上で、紅型の技術が伝えられない本島周辺の島々に遺された紅型は重要である。初公開となる資料に、小浜島の佐久伊嶽神司 登野貞（1902-2000）（勲七等瑞宝章受章）が、神行事の際に使用したという紅型のうちゅくい（風呂敷）がある〔図4〕。神司の簪とともに遺された。紅型は沖縄本島以外では染められていない。しかし、竹富島にも「祝祭典の長膳を包む風呂敷」として紅型のうちゅくいが遺され（喜宝院蒐集館蔵）、久米島には久米島の兼城ノロ（神女）が祭祀の際に用いた紅型神衣裳ほか数点の紅型神衣裳が伝えられる。それら紅型に表された意匠や技法は、琉球王尚家一族が着用した最も高い技術の紅型に比較すればやや劣り、権威の一表象とし

て王族一門に用いられた紅型とは技術的にも差別化されたものであったと窺われるが、王府からはなれた各島々の「祭り」や「神事」という祭祀の場に用いられた紅型は、権威の一表象として存在したと推測することができる。

三 踊衣裳——第二次世界大戦後の舞踊家所蔵衣裳

1. 親泊興照（注5）

親泊興照旧蔵の「白地松皮菱繫に扇団扇菊椿文紅型踊衣裳」(親泊久玄所蔵)〔図5〕。王朝時代の古典柄に典拠した意匠である。城間栄喜ほか多くの紅型師によって制作された同一柄の紅型が、鎌倉芳太郎旧蔵資料ほかの古典柄の配色に準じて臙脂（紫）の松皮菱であるのに対し、松皮菱には青色を選び、灰色を基調とする菊や椿の配色が特徴的である。少なくとも興照が1957年前後までの比較的早い時期に那覇で制作したもののか。特に青や灰色を多用する紅型は、栄喜に師事した名渡山千鶴子などが好んで制作しており、名渡山紅型研究所（名渡山愛順主宰）、もしくは、知念績弘周辺の作かと考えられる。上質の絹地は経年でややクリーム色を帯びたやわらかな印象となっている。戦前、沖縄の反物の主流は「ふじぎぬ」と呼ばれる沖縄県産の絹織物（反物）であったといい（養蚕から行った）（注6）、するりとなめらかな手触りの同衣裳の絹地は、戦後、紅型として用いられる反物が次第に日本本土から入ってきた「縮緬」へと移行する以前の、貴重な「ふじぎぬ」を用いた紅型と分かる。1966年（昭和41）9月琉球新報社主催 第1回琉球古典芸能コンクール出場の際には、後に二代目を襲名した親泊（島袋）久玄が興照から借用して「総掛」を踊った（久玄は同コンクールで新人賞受賞）。興照は同衣裳を「総掛」や「かぎやで風」で用いたという（注7）。興照旧蔵紅型踊衣裳として直接に伝えられた貴重な現存資料。

2. 宮城能造（注8）

今回の調査で、知念績弘による踊衣裳「白地紗綾型に団扇檜扇紅葉模様紅型衣裳」（沖縄県立博物館・美術館蔵／琉球王尚家伝来の紅型衣裳を典拠とする古典柄）が、宮城能造の踊衣裳であったと判明。地紋とされた紗綾型に紫色を用いた歌舞伎衣裳にも近い配色の同衣裳のほか、能造は薄紫色地に龍の丸紋などを散らす知念作の紅型衣裳などを着用したが、特に重要な点は、能造が名護市（名護市中大区公民館「白地松枝垂桜燕流水菖蒲模様紅型踊衣裳」）（注9）や伊是名村など地域の芸能に、自ら衣裳や幕を制作したことである。多くのスケッチなどを遺した能造が、伊是名に「組踊」の猿面（注10）や地域の舞台道具としての踊衣裳・幕など独自の表現を伝えたこと

は、民俗芸能を含む沖縄近現代の芸能が辿った変化と様相を考察する上で重要である。

3. 安座間澄子（注11）

安座間澄子旧蔵踊衣裳（安座間本流二代目家元 安座間明美所蔵）は、名渡山愛順の作品が中心となる。城間栄喜の紅型にみられる濃色の強い主張と華やかさに比べて幾分地味にも感じられ舞踊家の好みの分かれるところだが、ひかえめな色味にはしつとりと落ち着いた品格と優美さが感じられ、古式ゆかしいおもむきを放つ。名渡山愛順「花色地牡丹枝垂桜蛇籠流水桜菊菖蒲文様紅型踊衣裳」〔図6〕は、金武良章振付創作舞踊「赤田風」で澄子が打掛に使用。同意匠は、尚順（松山御殿）関係者の元に遺された黄色地紅型衣裳と肩裾模様ともに同一である点が興味深く、肩から腰にかけての意匠は、琉球王尚家21代 尚昌関係資料として（注12）平成期に入り首里城に収蔵された尚家出身者旧蔵「浅地牡丹枝垂桜両面紅型単衣裳」（苧麻）の意匠とも同一の大模様。裾部に配された意匠が紅型復興期に制作された例として見出されるのは珍しく、特に愛順紅型に特徴的意匠といえる。なお、今回の調査で真境名律弘（真境名本流師範、国指定重要無形文化財「組踊」総合認定保持者）所蔵の踊衣裳中に、肩から腰にかけて同一の模様を染めた城間栄喜紅型〔図7〕が現存することも明らかになった。明るめの花色地に栄喜紅型の色彩的特徴が際立つ同紅型踊衣裳は、師の真境名由苗（真境名本流二代目家元）が戦後制作して踊衣裳として用いたもの。いくぶんぼったりとした肉厚な型彫りの味わい、裾部には栄喜踊衣裳に典型的な蛇籠流水菖蒲沢瀉桜に鴛鴦の文様が表され、現在でも宮城幸子ら多くの舞踊家に継承される栄喜踊衣裳「松枝垂桜藤燕蛇籠流水菖蒲沢瀉桜鴛鴦文様」が栄喜の意匠として定型化される過程の試み作品として興味深い。澄子が金武良章創作「首里節」などで着用した「変り松皮菱に梅桜蛤模様紅型踊衣裳」は、城間栄喜の弟子大城貞成周辺の作か。特色あるからし色を地色に染めた「枝垂桜燕鶴蛇籠流水菖蒲沢瀉文様踊衣裳」は、「瀬名玻」の染めと推測される〔図8〕。1932年（昭和14）、柳宗悦ほか日本民藝協会同人が沖縄を訪れた際に芹沢銈介、岡村吉右衛門らが調査を行った瀬名玻良持の工房は、後に、知念績弘（1905-1993）と同年であった良賢の時代、他の紅型師との差別化を意識して、紅型ではなく「染料染め」に取り組むこととなり（注13）、その方針と取り組みが現在まで継承されているために全体的に紅型師の手掛けた紅型とは異なる色使いが行われることが特色である。ほかに金武良章創作「首里節」の打掛として用いた城間栄喜作「白地雪輪牡丹菊桜梅模様紅型踊衣裳」〔図9〕なども遺されている。

このほか、今回の調査所蔵の明らかになった重要な踊衣裳には、玉城秀子（国指定重要無形文化財「琉球舞踊」総合認定保持者、玉城流玉扇会二代目家元）所蔵となる藤村玲子の創作柄、二代目宮城能造（沖縄県指定無形文化財「沖縄伝統舞踊」保持者）の所蔵する名渡山愛順の踊衣裳がある。玉城秀子は、栄喜踊衣裳としては珍しい意匠「鳳凰松雲形藤燕籬菊文様紅型」や、運天一恵による「からし色地牡丹蝶模様紅型」（創作「王女狂乱」に着用）など、特色ある紅型踊衣裳を所蔵。藤村玲子「花色地雲杵牡丹枝垂桜文様紅型」は「天川」に着用。藤村玲子「薄紫地雲杵松藤鶴蛇籠流水菖蒲沢瀉文様紅型」は「諸屯」のために制作した。「総掛」ほかに用いる藤村の創作柄「白地雲に松竹梅菊牡丹文様紅型踊衣裳」は、紅型資料としても貴重である〔図10〕。二代目宮城能造の所蔵する名渡山愛順の踊衣裳中、紫色地は特に愛順が選んで染めた地色という。注目される愛順「白地松竹梅鶴流水菖蒲文様紅型踊衣裳」〔図11〕は、朱と薄い水色という特色ある配色の組み合わせ、菖蒲の花弁に見られる独特な隈取りがなされ、腰から裾の模様が女子美術大学蔵「黄色地雲に松梅と鶴流水に菖蒲文様紅型衣裳」と同意匠となる。栄喜ら職人系の紅型師よりも日本本土の染織の配色に近い感性があり、伝統的な紅型の配色から離れた愛順の表現が垣間見られる。

四 幕

1. 調査内容

本調査を計画した当初、報告者は、沖縄県内の各地域に使用される舞台幕の画題に、ある程度の分類が可能という想定をおこなっていた。しかし、伊是名島、竹富島、小浜島ほか各地域に伝えられる舞台幕を調査していくうち、八重山を中心として紺地に松竹梅鶴亀という明治～昭和初期の比較的古い舞台幕が残される一方、各地域には、昭和期から制作され始めたと考えられる新しい図柄の舞台幕が多く残ること、例えば小浜島に1969年（昭和44）作となる、能舞台を思わせる松の巨木と梅竹文様、周囲に伝統的な鶴文様を配する幕〔図12〕が使用され続けるなど、つまり、昭和期にかなり自由な図柄の変化がおこった可能性が明らかになった。現在、沖縄の各地域では、能舞台を思わせる松の巨木や絵画のような樹木茂る森の風景、あるいは、歌劇など演劇の影響を受けたと考えられる海を遠景に望む浜辺の風景や実景の図柄など、さまざまな幕が使用される。調査の詳細な記録、および広範囲にのぼる幕の実態をまとめていく作業は今後の課題とし、聞き取り調査により得た幕の実態を記録化することで、これまでまとめた調査研究の行われていない紅型幕の様相を考察する糸口としたい。

2. 竹富町——城間栄喜の舞台幕

現在、竹富島では東（あいのた）・西（いのた）・仲筋（なあーじ）という地域毎に異なる3枚の幕が使用される。種取祭の初日は毎年交互に東か西の幕を出し、2日目は仲筋の幕を使用。どの集落の幕も、奉納芸能として演じられる組踊「父子忠臣」（仲筋）、組踊「伏山敵討」（西）などで使用する太刀が刺さり空いた穴などが残る。島にはかつて真喜志康忠（重要無形文化財「組踊」総合認定保持者）らも訪れたという。

1957年（昭和32）に城間栄喜が紅型を染めた仲筋の舞台幕〔図13〕については、2003年に報告者が仲筋で染織資料を調査した際に初めてその存在が確認されたが、今回あらためて調査を行った結果、生地^{がくやまく}の織手や染めの経緯などが初めて明らかとなった。生地は、竹富島の糸芭蕉を製織したもので、地元の婦人たちの制作となる。現在、同幕は、種取祭の「シクミ」（リハーサル）の際と結願祭に使用するほかは、2003年（平成15）に制作した城間栄順の幕（生地は中国麻）を使用している。【仲筋／島仲彌・島仲ナミ・大春江の話】：「古い幕（戦前の幕）は、そうとうに古くなっていた。（生地は）楽屋幕なので、おもてもみえるように、荒く織ってもらった。」「狩俣正三郎さん（大正14年生まれ）が頑張って。年配格は嘉手川清さん（明治生まれ）。仲筋のばあちゃんたち、60歳過ぎ、当時70代のおばあちゃん達、が（芭蕉布の）反物を製作した。地機と高機。嘉手川清さんが、朝3時に太鼓を打って、皆を集まらして、「みんなでつむぎならえ」ということで、横糸をつむいで習った。」当時、反物を製作したのは、加治工トヨ（大正2年生まれ）、佐加伊ハツ（大正4年生まれ）、大春江（嘉手川清の娘、大正11年生まれ）、請盛すゑ子（八丈島出身）、狩俣カマド（狩俣正三郎さんの母）、という。「島で織った反物を、（当時、沖縄本島にいた島仲彌氏のもとに）、宮良透（大正元年生まれ）が持ってきた。」「那覇市安里にあった（島出身の）前里（真栄里）文雄さんのうちに、前原栄友、わたし（島仲）が、毎晩集まった。前原と二人で、（紅型を染めるための）寄付を集めに行った。」「城間（栄喜の工房）に、前の幕（仲筋蔵1961年制作「紺地松竹梅波文様紅型幕」）を持って行って作った。城間が紅型をやっているということを知っていたので。」

また、東集落：1952年（昭和27）8月制作の幕は、伝統的な紺地松竹梅鶴亀の模様で、城間栄喜による仲筋の幕と同模様。現在は使用していないが、仲筋と同じく生地は集落の婦人たちによる芭蕉布。【内盛スミ（大正14年生まれ）の話】：〈生地の作製〉「婦人会の人たちで話し合いをして、何よみくらいだよ、と聞いて。一人で半斤、600グラムを一人で紡いだ。昼も夜も紡いで。すぐに織れるようにしてくるわけ。太めにいれてとか。上布ばかりつむいでいたお婆さんは、糸が細かすぎて怒られていたよ。」

「幕ができあがったとき、石臼でむぎを挽いて、茶碗でむぎこ溶かして、天ぶらをつくった。小皿の大きさの天ぶら。（当時は）小麦粉が無いから。すーだいという係のうちでお祝い。役員が生地を持って、本島に（染めを）頼みに行った。八重山では（紅型は）やらない。（紅型は）本島。」〈戦前の幕について〉「古い（戦前の）幕を預かっていた。押し入れの段ボール箱の中に入っていた。おじいさん（ご主人内盛正玄（大正14年生れ）氏の父親カナー）が預かっていた。たらい二つ使って、洗ってきれいにしようとしたら、ぶー（苧麻）が（繊維が傷んでしまっていて）だらだら落ちてしまって。藍染めの紺色で模様は松竹梅鶴亀だった。ぼろぼろだった。」このほか、西集落：1976年（昭和51）制作の舞台幕も、集落の婦人達が糸を紡いで製作した反物に、沖縄本島で紅型を染めたもの。模様は同じく「松竹梅鶴亀」に日輪を配する。

このように明治大正期の古式が残る八重山の「松竹梅鶴亀文様」紅型舞台幕は、第二次大戦後、城間栄喜を中心に技法が継承されたが、一方、現代の幕の中で特に注目しておきたい重要な作品は、現在、読谷村文化センター鳳ホールで使用される玉那覇有公（国指定重要無形文化財「紅型」保持者）（1936- ）の舞台幕である〔図14〕。師である栄喜の「力強く勢いよく描くように」という言葉を守り制作された同幕は、有公の他の幕にまして明るく華やかな色彩による生き生きとした文様表現がなされる。生前、栄喜は紅型幕について「幕に負けてしまう芸ではなく、幕の紅型模様にも負けないだけの踊り（芸能）をしてほしい」と語ったという（注14）。このほか現代の舞台幕には、城間栄順作国立劇場おきなわ所蔵品などがある。

2. 伊是名村仲田一宮城能造の楽屋幕（座敷幕）

宮城能造が描いた手書きの幕〔図15〕。遠近法をもちいた襖絵には菖蒲と鶴が描かれる。能造が、約1ヶ月間、仲田に滞在した折、制作された。1956年（昭和31）頃のことである。座敷幕の現物は失われている。現在の公民館造成に伴い、新しい幕制作の見本として日本本土の「緞帳屋」に送った後に所在不明となったという。同幕は、1978年（昭和53）頃まで使用されていたが、現在は、能造の幕を元に本土の緞帳屋が制作したものを使用。生地はメリケン袋をつなぎ合わせて「道で縫った」もので、伊禮一昇によれば、住民達が見守る中、能造は「即興で」この幕を描いたという。【伊禮一昇（元 仲田区長）の話】：仲田の組踊「仲田では「伏山敵討」「東辺名夜討」「矢蔵の比屋」「姉妹敵討」を繰り返して演じている。昔は「手水の縁」もやった。わたしは4年ほど演技をやって、29歳頃から10年くらい指導をした。公民館で組踊の指導している時、50代60代の先輩たちのために舞台から離れたところに席を設置して、感

想は紙に書いてもらって、演技が終わってから紙を渡してもらうようにした。いっぺん通しで演じて、指摘されて、また通し。夜の12時近くまで。（終わるのが）1時2時の時もあった。稽古は、最初の1週間はせりふ覚え。次に立ち稽古。台本は2週間で回収してしまう。次は、楽屋と役者のタイミング合わせ。…「東辺名夜討」は夜の仇討ちだから、松明をつけて行く。仲田では（松明で歩き続ける場面も省略せずに）すべてやる。曲に合わせて歩く。柳節17分とか。…（組踊「二童敵討」の）稽古の時、二童の酒を飲む場面で、（杯に）本当に酒を入れたりして。皆、酔ってしまって、立ち上がれなくなってしまった。…」「中学生になるとき、本島の親戚の家に下宿した。若い頃に亡くなってしまった人だったが、これを読みなさいと組踊の本を買ってきてくれた。亡くなった時、形見分けで組踊の本をもらった。昭和37年発行の組踊全集だった。」「父（政則）は、島に来た宮城能造先生に2度ほど、（芝居をやらないかと）勧誘された。でも父は長男だったので、家を継ぐために能造先生の勧誘を断った。」

3. 眞境名由康（注15）と寄贈幕

幕の両端に「眞境名由康舞踊研究所 江」〔後援会〕（朱色）の文字が染められる〔図16〕。木綿の生地片面染め。模様は、左右にうちゅくい（風呂敷）の図柄として典型的な松竹梅の丸紋と、丸紋の中央に鶴の文様。幕中央には日輪に鶴が表された檜扇と、流水のようにも見える朱色の線に沢瀉の葉、でいごの花が染められる。眞境名（瀬底）正憲（国指定重要無形文化財「組踊」総合認定保持者、眞境名由康組踊会会長、宗家眞境名本流「眞薫会」会長）の話：「牧志にあった眞境名由康先生の稽古場の奥にしまわれていたのを見つけ、黄色地の横の部分の上下に付け足して現在の大きさにした。若い頃、稽古をしていた時には見たことが無かった。紺地の幕と一緒にしまわれていた。」「鶴の形は日本航空（JAL）の鶴に似ている。終戦の余韻が残っている時期、ディゴは歌にも使われた。「ディゴの木ぬ花や かりてあとからどう 花ぬさちゅる」。ディゴは復興の象徴だった。（生地の木綿は）、メリケン袋の生地と同じで、軍服の払い下げをほどいたりするなどして作ったものだろう。暈かしが紅型風だけれど、染め屋で紅型風に染めたものではないか。」「ディゴと眞境名由康先生とはつながりがある。由康先生が創作した「人盗人」では、（子どもを）ディゴで誘って、次に、人形で誘う。」

生地を城間栄順（城間びんがた工房）で補修後、眞境名由康組踊会にて「人盗人」などに使用。玉那覇道子によれば、戦後まもなく城間栄喜の親戚にあたる男性が那覇でのぼりなどを染めていて、特に「紅型風に」染めることも行っていたという。ただ、

眞境名由康の生前にこの幕が使用されたという記録は残されておらず、時代の変化の中で新たな意匠（景色）を舞台に求める動きの一方、王国時代から続く伝統的世界を舞台に表現し続けた眞境名由康の思想がいかに交錯したかという点は、興味を惹く問題といえる。

まとめ

戦前の舞踊家（男性）に師事した親泊久玄らによれば、わずかに天女の衣裳について金武良章から、黄色地に鳳凰の模様を表した紅型を着けたことを聞いたほかは、親泊興照ら師匠が特に紅型踊衣裳について語ったという記憶は無く、むしろ親泊興照や眞境名由康らにとって重要なことは、舞踊や組踊の内容を問うものであったという。わずかに残された記録写真などからも、各演目に特定の意匠（紅型）が固定化した様は見出されない。近現代の紅型踊衣裳の大きな特徴は、第二次大戦後、次第に各舞踊家が創作柄をも含めて紅型踊衣裳に個性を求めるようになった点である。戦後、伝統芸能の世界に参画した女性舞踊家を中心に、舞踊家それぞれは各人の師弟関係や趣向にもとづいて衣裳を選択する現状にあり、それは、第二次世界大戦前後の舞踊家、および現在70代以上となる国指定重要無形文化財「組踊」保持者（各個認定）や同総合認定保持者ら（男性）の大半が、自身の舞踊がある程度のレベルにまで達した段階で、初め名渡山愛順の衣裳を染め、次に城間栄喜の紅型衣裳を求める傾向にあった様相とは異なるものである。今日では「舞踊」という身体行動のほかに、各舞踊家に所蔵される紅型衣裳を通じて各舞踊家の人柄や思想が少なからず伺われるのであり、紅型衣裳は琉球王国時代における権力の一表象から舞踊家の個性の一表象となったともいえる。廃藩置県後に琉装の風習が失われた沖縄県にとって、芸能の舞台は「紅型」衣裳が今なお生きた着衣として存在し続ける場であるのみならず、舞踊家の選択と思想を問うものとなっている。戦前、あるいは第二次大戦後紅型復興期を中心とする第一世代、および第二世代の紅型師に関する重要資料として、今後も芸能の場に於ける紅型について調査を行って参りたい。

【調査協力者】（敬称略、順不同、役職名は割愛させていただきました） 玉那覇有公、玉那覇道子／親泊久玄、親泊邦彦／眞境名律弘／花城正美、知念かねみ、飯田泰彦／島仲由美子、島仲彌喜、吉澤やよい、島仲彌、島仲ナミ、大山栄一、内盛スミ、友利勝、阿佐伊拓、上勢頭同子、上勢頭立人／濱里清二、伊禮一昇、伊禮正隆、仲田好二、山本紗織、名嘉和枝、泉トミ、濱里キミ、前川史子、松田昭美、中川志賀子、中川貞

允、濱里米子／東江喜美、上原安子、末吉正子、儀間善光、末吉実好／仲田富好／山内靖昭／照屋勝義、島袋英治、長浜眞勇、銘苅良光、神田米三、松川亨、松川治美／眞境名正憲、大城功／玉城秀子、玉城盛義／安座間明美、稲福義男／宮城能造、宮城茂雄／ ＊伊是名島での調査にあたりましては、親泊久玄氏、濱里長希氏、伊禮一昇氏、仲田好二氏に、竹富島での調査にあたりましては、島仲彌喜氏・島仲由美子氏に、格別のご高配を賜りました。 ＊本研究の御推薦を賜りました肥田路美早稲田大学教授、恩師 村重寧早稲田大学名誉教授に深く御礼を申し上げます。

注

- (1) 戦後の紅型についてふれた論考は次のとおり。①渡名喜明「戦後のびんがたの歩み」『沖縄県立博物館紀要第2号』1976年、②伊佐川洋子・與那嶺一子「近現代の紅型について」『沖縄美術全集 第三巻・染織』沖縄タイムス社、1989年。
- (2) 拙著「琉球紅型の研究」早稲田大学大学院文学研究科 2009年11月。
- (3) 拙著『琉球紅型』（株）ADP、2012年1月5日発行、独立行政法人日本学術振興会「平成23年度科学研究費補助金」研究成果公開促進費「学術図書」（課題番号235022）の助成による。
- (4) 拙稿「紅型の踊衣裳——伝統芸能の場に於ける琉球王国末期から現代の色と形」『民族芸術 vol. 27』民族芸術学会、2011年。
- (5) 親泊興照（1897-1986）／那覇生まれ。親泊本流親扇会初代家元。国指定重要無形文化財「組踊」総合認定保持者。国指定重要無形文化財「組踊」総合認定保持者。沖縄県指定無形文化財「沖縄伝統舞踊」保持者（第一次認定）。主な受賞に勲五等旭日章、黄綬褒章など。
- (6) 関係者からの聞き取り調査による。
- (7) 組踊ほかで興照の使用した髪は、現在、親泊邦彦（親泊本流親扇会師範）が使用している。
- (8) 宮城能造（1906-1989）／首里生まれ。国指定重要無形文化財「組踊」総合認定保持者。沖縄県指定無形文化財「沖縄伝統舞踊」保持者。沖縄県指定無形文化財「琉球歌劇」保持者。主な受賞に黄綬褒章、勲五等双光旭日章、第七回伝統文化ポーラ特賞。
- (9) 親泊久玄氏（親泊本流親扇会二代目家元、国指定重要無形文化財「組踊」総合認定保持者、国指定重要無形文化財「琉球舞踊」総合認定保持者）からの聞き取り調査により、2011年初めて所在が明らかになった。
- (10) 親泊久玄氏からの聞き取り調査による。
- (11) 安座間澄子（1929-2008）／那覇生まれ。安座間本流澄之会家元。徳八流太鼓師範。沖縄県指定無形文化財「沖縄伝統舞踊」保持者。金武良章（国指定重要無形文化財「組踊」総合認定保持者）に師事。沖縄県文化功労賞、沖縄芸能連盟功労賞など受賞。
- (12) 関係者への聞き取り調査による。
- (13) 聞き取り調査による。
- (14) 聞き取り調査による。
- (15) 眞境名由康（1889-1982）／首里生まれ。国指定重要無形文化財「組踊」総合認定保持者（第一次認定）、沖縄県指定無形文化財「沖縄伝統舞踊」保持者（第一次認定）。



図1 「水色地霞枝垂桜蝶山水菖蒲桜菊文様紅型踊衣裳」と弥勒の面 伊是名村勢理客

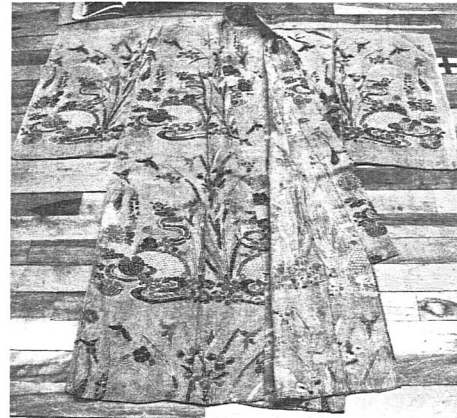


図2 「黄色地流水蛇籠沢瀉菖蒲文様紅型踊衣裳」伊是名村勢理客

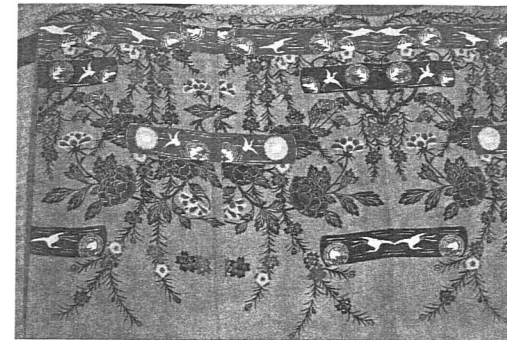


図7 城間栄喜「花色地牡丹枝垂桜燕蛇籠流水菖蒲沢瀉桜鶯文様」真境名律弘氏蔵

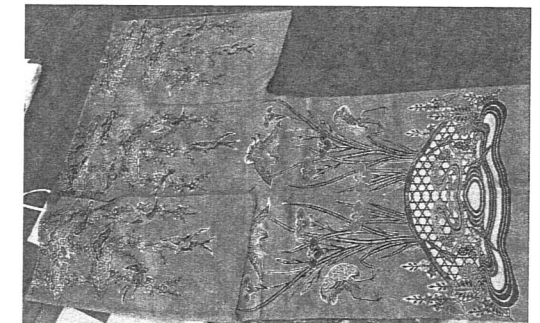


図8 安座間澄子旧蔵「からし色地枝垂桜燕鶴蛇籠流水菖蒲沢瀉文様踊衣裳」安座間明美氏蔵



図3 伝統祭祀「イルチャヨー祭り」(旧暦8月11日)
(写真提供/勢理客公民館)

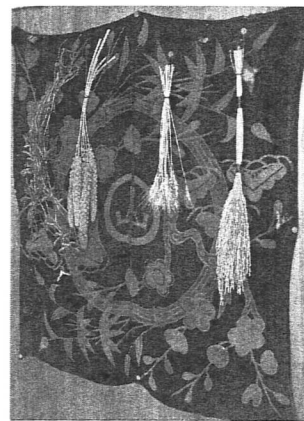


図4 小浜島佐久伊嶽神司 登野貞旧蔵「うちゅくい」
花城正美氏蔵



図9 「首里節」舞踊：安座間澄子 紅型：城間栄喜
「白地雪輪牡丹菊桜梅模様紅型踊衣裳」
(写真提供/安座間明美氏)



図10 「本真花」舞踊：玉城秀子 紅型：藤村玲子
「白地雲に松竹梅菊牡丹文様紅型踊衣裳」
(写真提供/玉城秀子氏)

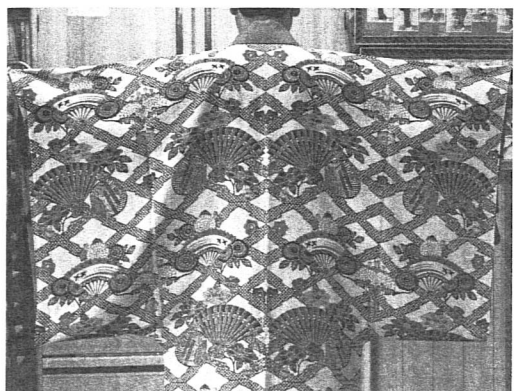


図5 親泊興照旧蔵「白地松皮菱繫に扇団扇菊椿文様紅型踊衣裳」親泊久玄氏蔵



図6 名波山愛順「花色地牡丹枝垂桜燕蛇籠流水桜菖蒲文様紅型踊衣裳」安座間明美氏蔵

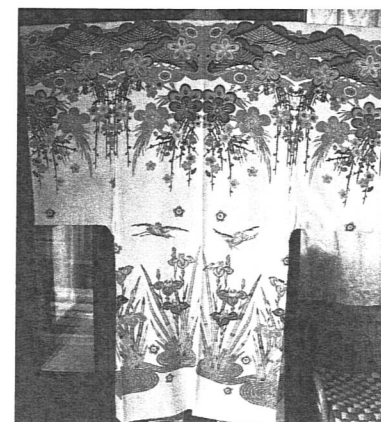


図11 名波山愛順「白地松竹梅鶴流水菖蒲文様紅型踊衣裳」二代目宮城能造氏蔵



図12 小浜島舞台幕と結願祭奉納芸能「ブービキ」
1996年 (写真撮影・提供/知念かねみ氏)

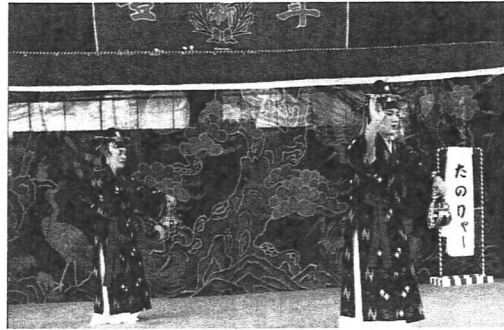


図13 仲筋の舞台幕（紅型：城間栄喜）と豊年祭奉納芸能「たのりやー」
1987年（写真提供／島仲由美子氏）



図14 玉那覇有公「読谷村文化センター鳳ホールの舞台幕」
（野村流音楽協会組踊地謡研修部第29回自主公演「えにし」／親泊本流親扇会・親泊久玄組踊保存会による組踊「花売の縁」リハーサル風景／2012年4月7日撮影）



図15 伊是名村仲田、宮城能造の座敷幕と仲田の棒術
1969年5月26日（旧公民館完成記念）
（写真撮影／USCAR、写真提供／仲田公民館）

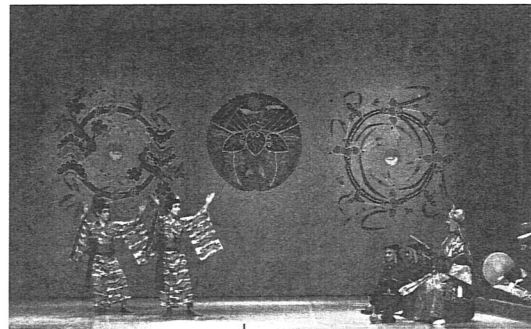


図16 眞境名由康の寄贈幕
組踊「二童敵討」（沖縄県芸能関連協議会主催「組踊」ユネスコ無形文化遺産登録記念「琉球伝統芸能欧州3カ国公演」より／2011年11月2日／写真撮影／Mario Boccia、写真提供／ローマ日本文化会館）

*図1、2、4、5、6、7、8、11、14は筆者撮影。